

國道八號線 (三)

金森誠之

十二

上野原の小學校の櫻は今を盛りと咲き亂れてゐる、今日も早や暮れて、宵暗は扇山の方からだん／＼迫つて、櫻の樹もその間に點々と灯された電燈に映えた眺は殊の外美しい校庭でボール投げをやつて居た小供達も四邊が喜くなつて來て、もうボールが見えなくなつたので、

「歸らうよ」

と一人が云ふと、まだ残りおしそくに道具を片付け初めた。

「君、正ちゃんが通るよ」

「ウン、彼奴の姉さん東京の旦那のお妾さんになつたんだつてね……」

「ほんとうかい？」

「昨日家の姉さんとお母さんが話してつたよ」

「いやな奴だね、皆んなではやしてやらうか」

五、六人の小供は聲をそろへて、

**お妻さんの弟ヤーイ**

櫻の木の下を薬瓶を持つて通る正次には何の事だか判らなかつたが、友達が集つて自分の方を見てはやしてゐるのに気がついた。

「お妻さんの弟ヤーイ」

再び聲を揃へて叫ぶ。

正次が不審に思つて足を止めて聞いてゐると、小供達が「ドヤ〜」と集まつて來た。

「君の姉さん、東京の旦那のお妻さんになつたそうじゃないか、お妻の弟なんかともう遊ばないよ」

一人の悪太郎らしいのが云ふ。

**何に!! お妻なんかになるかい失敬な!**

云ふよりも早く正次は悪太郎を殴りつけた。

其處には小さい亂闘が初まつたが、正次は衆寡敵せず、皆んなに殴ぐりつけられて、持つて居た薬瓶も割られてしまつた。

驚いて正次が泣き出したのを見ると、子供達は蜘蛛の子を散らす様にげ去つてしまつた。

君どうしたんだい？

其の時丁度通りかゝつたのは、技師の荒尾であつた。

「泣くんぢやないよ」

と云ひながら衣服についた、泥などを拂つてやる。

「友達と喧嘩したんです」

「喧嘩なんかしたらダメだよ」

「僕悪くないんです、友達が僕をお妾の弟だなんて云ふから、打つてやつたんです、そしたら皆んなで僕を打つて藥瓶を割られてしまつたんです」

「君の姉さんはお妾さんじゃないんだらう？」

「僕はないと思ふんです、けれどそんな話で姉さんが泣いて居たのを知つてゐるんです、だからはつきり判らないんです」

友達との喧嘩には涙を出さなかつた正次は、

若し姉さんがお妾さんになつたら僕いやだなあ——

と云ふと共に、非常な不安にかられて急に泣き出した。

「僕したらもう學校なんかに行かないや」

荒尾は氣の毒になつて、正次を抱きかゝえながら、

「お妾になつて居ないだらうけれど、昔から親孝行をする爲に、悪い所へ身を賣つて褒められた人もあるから、姉さんは若しそうにしてもえらい人だよ。

假令悪い事だとしても、親孝行と云ふ立派な目的の爲めだからちつとも恥しくないんだから學校へ行かないなんて云ふんじやないよ」

荒尾に慰められて、正次は氣を取り直し、「ウン／＼」と首肯しながら熱心に話をきいてゐる。

「さあ元氣を出して藥瓶をもう一度貰つて來給へ」

正次は首肯しながらもじ／＼してゐる。

「どうしたんだい」

お金もつ持つて居ないんだから、藥屋へ行つても……

「いゝよ／＼お金はおちさんがやるよ」

と云ひながら、五十錢銀貨を二つ渡してやる。

「こんなにいらぬです、三十錢です」

と返さうとするのを推へて、

いゝから取つて置きな、お父さんに何か旨いものでも買つて行つてあげなさい

小供は喜んでかけ出して行く。

荒尾は如何にも可憐そうなその後姿を見て臉が熱くなるのを覺えた。

### 十三

路線を選定するのに初め參謀本部の地圖を用ゐて、大體の見當をつけるのであるが、誰しも陥り易い誤りは、其の地圖で最初に定めた線を良いものと信じきる事である。

其の後實測するにしても、其の線が最善なりと裏書する氣持ちで、或は他の線が適しない事を證する氣持ちで、色々の調査をする傾きがある。これは寧ろ反對に其の線が適しない事、其の線の缺點を色々と調べる事である。

荒尾が上野原の路線を定める時にも、同じく參謀本部の地圖を擴げた、そうして、議論なしに巖村から一直線に島田村を通過して、鐵道トンネルに平行して、トンネルを通ずるものを選定してしまつた。

上野原の原道に沿つた測量はして見たが、島田村線は、島田村地内、巖村への連絡等は精査したが、トンネルを通ずべき諏訪の山は、丁度其の線と平行して、鐵道のトンネルがある爲め、其のトンネルを通つて見た丈で、何の調査もして見なかつた。

期かな春である、荒尾は仕事の一段落に、諏訪の山根が、半島の様に相模川に突出してゐるのを、根づたいに、若し何か良い線もがなと、歩いて見たのであつた。急峻な崖で、其の爲めの收穫がなかつたが、幽邃な風光而かも其れが、樹の間がくれに、華やかな櫻で彩られて、其の下をあく迄も澄みきつた、相模の春の水が、白い波頭を見せて流れて居るのであるから、今更ながら、足を止めて見入るのであつた。

名倉から上野原へ通するのに、九十九折の坂路がある、今は荒れては居るが、昔の本街道は此處であつたとか、今でも關所の跡や其の道に沿つた夜泣き櫻で、名所の一つとして、上野原驛の名所案内に記されてゐる。

荒尾が丁度其の道にたどりついて、歸り路につかうとした時である。

失禮ですけれど内務省の荒尾さんぢやないでしょうか？

不意に若い女の聲に呼びかけられた。

「娵ガソリン屋の細田でございますが——」

娘は心持ち顔を赤らめて、

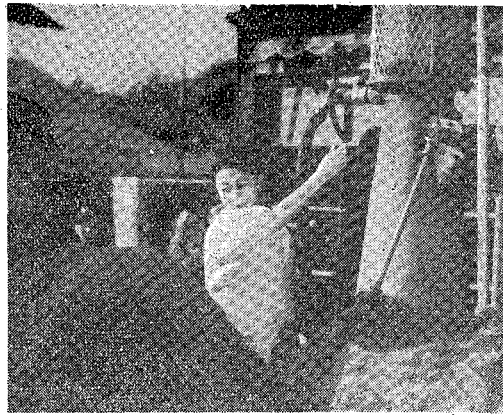
先達つては弟がいろいろお世話になりました——

と丁寧な腰をかゞめる。

ガソリン屋の前を通る時、奇麗な娘だとは見て知つて居つた、上ノ野の小町娘だとか、八號線を通る運轉手にこのスタンドを上ノ野のオアシス、なぞと云はれて居る程の美人だとの評判も聞いて居つたが染々、こうして顔を合すのは初めて

とある、今日は何處へ行つた歸るさでもあるか着物を變へて、殊更引き立つて見える。

この娘がお妾に？



娘はそれを聞くとボツと顔を赤らめて、

誰があんな悪口を云ひ出しましたのですか、そんなこと絶対にありませんわ——

如何にも美人である、神々しい迄の美人である、自分を見上げてゐる瞳は涼しく輝いてゐる、自分はそう信じ度くない。

「弟さんは無事に歸りましたか？」

「有難う御座いました、それからお金迄どつさり頂きました、——酒饅頭を買つて参りました、久しぶりで家中でおいしく頂きましたのですわ——」

御禮に是非上りたいと存じて居りましたのですけれど、スタンドの手が離せないのですからつい遅くなりまして、今日丁度親類の者が参りましたので、隣村へ用足しに行きましたのですが、歸つてから早速お伺しようかと思つてゐましたのです——丁度こゝでお眼にかゝれました」

「弟さん何ですか非常に心配されてゐましたが——」

この答を聞いて荒尾にはよそ事と思へず、自分の事の様にほつと氣が樂になつた。

「僕も歸る所です、一所に行きましようか——」

美智子は歩みながら、色々と物語る、あの依水莊の夜の出來事を聞かされたときは、荒尾は如何にも憤慨した。

聞けば、島田村を通る様に定めた事を、どうして鼻ぎつけたか、旺んに土地を買つて居るそうである、出來るならば路  
線を變へて、鼻をあかしてやり度いのだが、技師は絶對に私情を挟む事を許さない。

美智子の話に依れば、其の後猛烈な催促だそうである。

今日もお金の話で一寸親類へお頼みしてまゐりましたんですの

話を聞いてゐる荒尾には、何だか自分が助けてやらなければならぬ責任がある様に感ぜられて來た。

僕は母の所へ云つてやれば何とかかなりますから、一體、いくらあれば良いんですか？

娘は親切に感激しながら荒尾を見上げて、

あらそんな事まで——、私ほんとうにすみませんでした、つまらぬ愚痴など申上げ  
まして、親類の方で何とかかなと思ひますの。

晝間とは云へ入通りの殆んどない靜かな道を、而かも、今を盛りの春に彩られた桂川の絶景の雰圍氣に、感謝する美し  
い娘と、親切に勞つてくれる利々しい若者の間には、相互に氣には附かないが其處にある結ばれる、情の絆が出来るのは



自然の流れであらう、けれ共娘は、身分の距つてゐる自分を考へて、それを忍ぶべく努力をしてゐた、男は又そう云ふ氣持となるのをはしたくないと思つて自制してゐた。

「とてもいい景色ですわね」

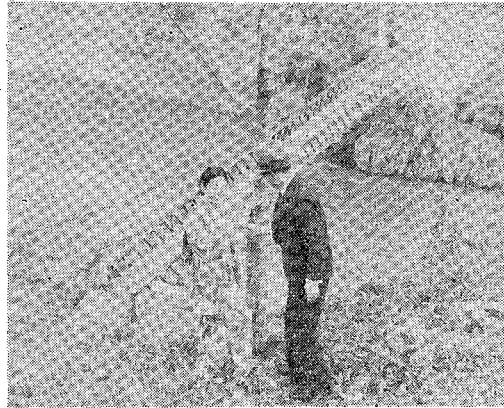
「櫻は今眞つ盛りですわね、父に見せ度うございますわ、とても櫻が好きなんですけれど今年はどうく——」

「一枝取つてあげまじょうっか？」

荒尾は路側の櫻に飛びついて枝を折つて、娘に與へる。

「有り難うございました——」

若し關所跡に立つて、この二人を見る人があつたらば、身形こそ、マツチしないが、戀人同志のラヴシーンと見えるであらう、其の背景に、架せられた釣橋は、このシーンを更に引き立てゝゐる。



十四

「お父様、今日は如何でございますか」

見る影もなく、うらぶれた部屋に、もう半年からの患いに、美智子の父は髪も茫々とのびて、春とは云へど、のどかな

らず、病の床に呻吟してゐるのであつた。

「ウン、少し良いようだよ、心配かけるなあ」

「いゝえ、思ふ様に介抱出来なくつて」



家賃の催促の話も、依水荘の出来事も父には少しも話をして居なかつた、自分を犠牲にして、重役の話を承諾すれば、父には数倍の加養をせしむる事が出来るだらうと考へると如何にも美智子にも苦しかつた。

父に相談すれば反対されるにはきまつてゐるが、これで若しもの事があつたとすれば、子として充分の力を盡したと云へるだらうか、荒尾さんが弟に親の爲めに身を賣つた娘を褒めたそうであるが、それを考へると、自分のしてゐる事は決して充分とは云へない。

美智子が父に薬を飲ませて、スタンド番に立たうとした時であつた、表の方に人のザワメキが感ぜられたが、障子が荒々しく開けられて、如何にも利屈つばい顔をした男が、四、五人の夫婦體の男を連れて這入つて來た。

執達吏の一行である、猛烈な家賃の催促の後正式の手續を採つて、強制執行をして、家屋を壊さうとするのである。ガソリン會社の豫定では、家賃不拂等の家屋はドン／＼壊して、島田村で既に賣收した土地へ建てようとするのであるが、先づ初めの鎗玉に上つたのは美智子の家である。

もう三日待つて頂けないでしよつか？

美智子は、何も知らして居ない父を驚かしてはと、拜む様に頼むのであつたが、氷の様な吏員には何の反響もなかつた。

「今日支拂つて頂けないんですね」

と念を推しながら、ためらつてゐる美智子を見て早速連れて來た男達に、

さあ片付けにかゝれ

と命令した。

驚いた美智子は、父親の所へ行つて泣きくづれる。

「お父さま、すみません、家が壊されかゝりました」

美智子は手短かに、次第を物語る。

「お父様に御心配をかけないで置きたいと思ひましたのだけれど——」

父親は身をもたげ、



いゝわ、勝手にさして置け!!

こう云つて、がばと床に伏してしまつた。

命ぜられた大工などが、梯子をかけて屋根に登り、葺いてゐる、トタン板をめくり初めた。町の人達が何事が起つたのかと驚いて集まる。

「家賃を拂はないから、家を壊して持つて行くのだつてさあ」

「娘さんを、どうとかしたと云ふのは偽だつたのね」

「氣の毒にね、あの孝行娘に、ケチをつけたのは何處の奴だい」

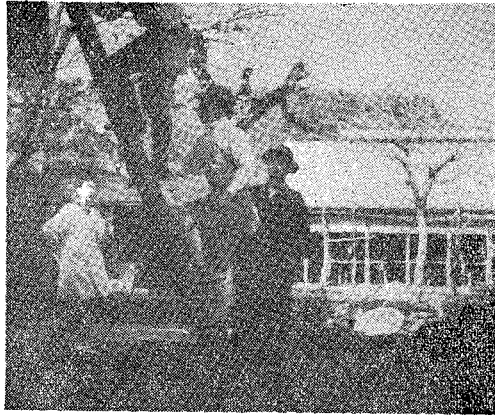
「僕はお前さんから聞いたんだよ」

「そんな事を云はないさ——」

人々は、唯あつけに取られて、誰一人仲裁に這入らうとするものもない、屋根は次第くくむかれて行く。

## 十五

正次は學校を終へて、五、六人の友達と馳けつくらをしながら、歸り路を急いで居た。

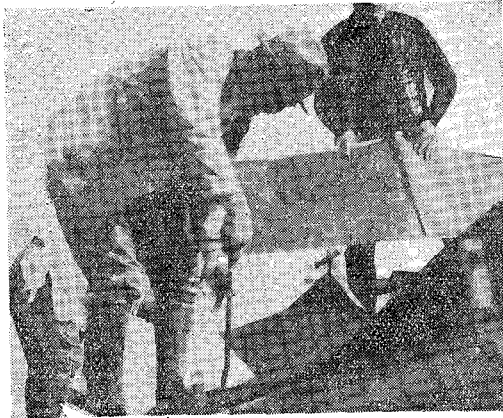


田の畦を越へた向ふの道から悪太郎共の罵聲、

お妾の弟やーい

正次達が立ち止つた。

彼奴等ぞやつつけてやらう



と友達の一人が云ふ。

「僕達はこちらの道を廻るから、君達あの家の側で待ち伏せして居給

へ」

二手に分れて走り出した。

正次が町へ這入つて、家の角を曲らうとした時、人々が只ならぬ氣色で、走つて行くのを見た。

「正ちゃん、あなたの家が壊されてゐるのよ、早く歸らなくつちや」

正次も友達も驚いて、正次の家へ急ぐ。

屋根の上の大工やブリキ屋達が、段々に屋根をはがして行つてゐる、この様を見て正次は憤慨した。

「馬鹿野郎、何しやがるんだい！」

いきなり手頃の石を拾つて、大工達目がけて投げつける。

友達も應援して石を投げる、小供とは云ひながら、大勢の投げる石の雨に流石の大工達も仕事がひるんだ。

餓鬼共何しやがるんだ！

屋根から降りようとしたが梯子が外されてしまつてゐる仕方がないから、屋根に平たくなつて石の雨を避けてゐる、見物の人々はこの様を見てどつと歡聲をあげる。

コラ何するんだ

正次は、執達吏に首玉を擱へられた、小供の敏捷さに、するりと其の手をぬけて、相手をね目つけながら、

僕の家を壊してる奴を退治してやるんだい！

「小供には判らないよ、君の家が家賃を拂はないから壊して持つて行くんだよ」

其の時、人混みを分けて折柄通りかゝつた荒尾が這入つて來た。

執達吏が小供と云ひ合つて居るのを聞いて居たが、

君、家賃を拂はないかも知れないが、病人の家を餘りヒドイぢやないか

と其の間に這入り込む。

不意の進入者に、執達吏が餘計な奴と云はぬばかりに、

君、何處の人だか知らないが、公務を執行してゐるんだ邪魔をすると、夫々の手續を取るぞ！

と肩をいからして驚かそうとする。

「金を拂へば文句はないんだらう、僕はこう云ふ者だ」

と名刺を渡し、

「公務で争ふならば、この家は僕の方の測量の目標だ、正式の手續を踏んで、測量を妨害しても良い様にしてやり給へ」  
名刺を見て、執達吏は稍丁寧になつた。

いや貴君は、この債務を引受けて下さると云ふんですね？

「勿論、とに角中止してくれ給へ」

執達吏は職人達に仕事の中止を命じる。

## 十六

美智子は病父と、途方にくれながら、どうする事も出来ず唯、枕元で泣き入つて居たが、頭の上では、職人達が屋根を

壊して居る音が、ガン／＼と響いて来る、何やらん表の方で、歡聲がどつと聞えると、其の音がしなくなつた。  
人に顔を見られるのも恥しいが、様子を見に出て見ると丁度、荒尾と執達吏との話がついて、職人達が屋根からぞろぞろ降りて来る所であつた。

荒尾を見つけた美智子は、喜びの餘り思はず駆け寄つて、

大變な事になりましたの！

と挨拶もそこ／＼に、荒尾の顔を見上げる、

美智子さん安心なさい、家を壊すのを止めさしました

この言葉に、美智子は驚いて、

まあ！ どうして頂きましたの。……實際の御迷惑にはなりません？

屋根を壊して居た職人達も降りて來てゐるので美智子はほつと安心したが、若しも荒尾に迷惑をかけては申譯ないと、非常な不安な氣持ちで荒尾の返事を待つてゐる。その時、この様子を見て居た弟が飛び出して來て、

「姉さん、おちさんが助けてくれたんだよ」

荒尾の方を向つて、



おちさん有難う！

と何度も頭を下げる。

荒尾は、正次の頭を撫でながら、

何でも良いから僕に任して置きなさい

と強く云ふ、美智子は仕方なく唯、

「有難うございました、すみませんでした」

と頭を下げるばかりであつた。

見物人は、事件が治まつたのでどや／＼と歸り初める。

其の時、悪太郎の連中が、正次の側へ顔を出して、

「君、悪口を云つてすまなかつたね、お婆さんじゃないんだつてね」

と氣の毒さうに詫を云ふ、友達は側から、

「馬鹿！ 云へるなら、もう一度云つて見ろ、のしちやうぞ！」

その劍幕に驚いて、急いで逃げ出して行く、荒尾は面白さうにそれを見てゐる。